カトリック高松教区報

2008年9月14日(第125号)
発行所 カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659 FAX 087-833-1484
Email
教区:tkcuria@mxi.netwave.or.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

平和旬間にあたって

高松教区長　溝部　脩

今年も暑い夏がやってきています。毎年広島の平和行進に参加していますがその度毎にいろいろなことに気づかされます。今年の被爆体験者の話は淡々とした語りで心の奥底までしみとおって来る感じがしました。感情を交えず、出来事を語る体験者には心服しました。平和運動とか言うと、何か大上段に構えて、鋭いカミソリのように聞く相手に挑みかかったり、説得しようと意気込むことがあります。それがかえって相手に嫌気を起こさせて、折角の平和運動がかすむ結果になればもったいないことです。

この二年間高松では宗教者平和懇話会を定期的に行ってきました。仏教界の人々と親しい交流をさせていただいています。その中で、平和を宗教者として促進しようと試みているのです。宗教は異なっても、平和を願う心には違いがありません。宗教を信じる者として、基本的な考えを交換しているうちに、平和の本質が見えてくるのだから面白いものです。結論的には、宗教者自身が平和を生きることが大事だと言うことでした。平和を生きるとは、いつくしみの心で周りを見ることです。人は各々苦しみを背負い、その限界の中で生きているものです。いつくしみの眼差しを有している人は、他人の苦しみに目を留め、その人の苦しみのそばに居たいと思うものです。事務的な態度とか、感情的な同情とかというものは好ましくありません。相手の必要をしっかりと見つめる目が要求されます。これができるには、自分自身が何よりも人とのかかわりを大事にして生きることです。

いつくしみの眼差しをもち　他人の苦しみに　目を留めよう

8月5日平和行進にて

カトリック教会は、世界の平和を促進することを至上命令として受けとめています。それが出来るためには、私たちが自分の平常の生活の中で、人とのかかわりを大事にすることです。お互いに争ったり、いがみあったりしている限り、世界の平和は実現しません。今年も平和旬間に当たって、平和を何よりも求めるという決意を新たにしましょう。

主な記事

2面　会議報告
3～5面　地区だより
5面　医療のともしび
6～7面　生涯養成講座レポート
7面　神学生だより
8面　お知らせコーナー

はばたき

「ようやく秋気の訪れを感ずるようになりました。」本号発刊の頃にはこのような前文が相応しい気候であることを願いたいものですが、生憎、この原稿作成時は炎天酷暑の真っ最中▼コラム子の所属する高知県赤岡教会周辺の地域では、商店街の発展を願って毎年七月に絵金祭りが開催されています。これは、幕末から明治にかけて土佐で活躍した絵師金蔵の描いた芝居屏風絵を年に一回、街路に陳列する独特の夏祭りです。絢爛で妖しく、おどろおどろしい夢幻の世界を描いた各作品の前には一本の蝋燭が灯され、その揺れる炎が暑気払いの効果も与えてくれます▼我々人間は、火の性質である明るさや熱さを生かすことにより進化し、目印、調理・消毒（変質）、さらには象徴としても活用してきました。聖書の中でも必須アイテムの一つとしてたびたび登場しますね▼今年の高知地区の教区民の集いは、赤岡町弁天座を会場として九月二十八日に開催されます。隣接の絵金蔵へもお立ち寄りください▼私たちのシモンズ神父様も、常に熱い志をお持ちでした。ご冥福をお祈り申し上げます。

会議報告

「平和メッセージ」最終案まとまる
第七回宗教者平和懇話会

事務局長　西川康廣

七月三十日（水）十四時～十九時まで、カトリック四国会館にて第七回宗教者平和懇話会を開催した。内容は次の通り。十四時～十五時（カトリック教会紹介）十五時～十七時（懇話会）十七時～十九時（夕食懇親会）。参加者は十二名（内カトリック教会関係者四名）。

＊十四時～十五時　カトリック教会紹介

前半は浜口末男神父（桜町教会担当）が「聖書」について、聖書の成立、構成、内容について話し、後半は聖堂にて西川康廣助祭（教区事務局長）が、教会とは何か、また聖堂内の様々なシンボルについて説明した。

Ⅰ　「平和メッセージ」の最終検討について

第八回ＷＣＲＰ「京都宣言」で述べられたキーワード「平和」「正義」「いのち」に関して、それぞれの宗教はどのように理解し、また表現しているか、諸宗教が共有できる言葉を見出す作業をこれまで積み重ねてきた。今回は出席者全員の意見を求めながら、メッセージ内容の最終検討をした。検討内容は次の通り。

メッセージ内容に関して大筋の合意はあったが、表現法や小見出しに若干の修正を加えることになった。特に小見出しには、

平和とは
正義に基づく平和
いのちあるものを慈しむこころ
大いなるいのち

の表現を用い、右記四点に関して考える材料を提供するという文言を序文に書き加えることにした。また表現は、できるだけ分かり易い言葉を使用することにした。更に今後の作業日程を次のように決定した。

１　今回の検討結果に基づき溝部脩司教はメッセージ原稿を書き直し、八月中に校正、九月中旬に印刷・発送予定。

２　メッセージ発送は、「ポストコングレスin四国」参加団体を対象とする。送り状の中に、香川県同様に他県（徳島・高知・愛媛）にも「宗教者平和懇話会」組織を立ち上げ、メンバー拡大に努める。そして勉強会や交流会を通して四国四県の交流を深め、「ポストコングレスin四国」に準ずる集いが開催できるよう希望する文書を添える。また「宗教者平和懇話会」主催のバチカン巡礼案内も同封する。

３　完成した平和メッセージを発信するだけでは十分に理解されにくいため、「宗教者平和懇話会」において、今まで手掛けてきた過程と経緯も添える。

Ⅱ　「宗教者平和懇話会」バチカン巡礼について

バチカン巡礼の旅程と予算案を提示し審議した。

日程＝二〇〇九年二月七日（土）～十四日（土）の八日間
団長＝溝部　脩（カトリック教会司教）
人数＝宗教者平和懇話会（香川）のメンバーを含む、総勢四十名を上限
対象＝案内状を四国四県に発送し、他県からも参加者を募る。
費用＝約三十万円
申込期限＝二〇〇八年十一月三十日（日）
（詳しくはパンフレット参照）

人権を考える委員会
二〇〇八年平和旬間を終えて

Srメリー・ギリス

今年も高松教区全体が祈りのうちに平和旬間を過ごせたことを、皆様から寄せられた「祈りのリレー」の申込書を拝見して強く感じました。祈りの意向をくださった方の祈りが、司教様司式の「平和を祈るミサ」の共同祈願になりました。また返信くださった申込書を、ミサの中で祭壇に奉献しました。ご協力ありがとうございました。

八月六日から十五日まで、毎日祈った方々がかなりいらっしゃいました。ロザリオ、平和の祈り、主の祈り、天使祝詞、一人で祈る、グループで祈るなど形はいろいろでしたが、教区全体が祈りで一つになった時でした

なぜこのように「祈りのリレー」などを企画するのでしょうか。その理由は、司教団会長岡田武夫大司教の平和旬間メッセージに良く説明されています。各教会で既に御覧になっているでしょうが、その中で、平和と人権尊重のために祈り、行動することの大切さが記されています。

「人間の心に、恐れ、不安、疑い、憎しみ、恨みなどの否定的な気持ちが生まれ、そうしたことがらが、人を動かし、争いや対立へと駆り立てることがあります。ですから、まず人の心に平和がしっかりと宿らなければなりません。」とありましたが、やはり私たちは自分の力だけで心の平和を得ることはできません。祈りによってこそ得られるものです。自分自身で祈り、そしてたくさんの人の祈りに支えられることによって、教会共同体（小教区も教区も）の中に平和の恵みは雨のように降り注ぐでしょう。それが「祈りのリレー」の目的です。私たち自身の心の平和が、世界平和へと繋がるものになりますように。

イエスは弟子達に、そして私たちに、話してくださいます。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるものではない。心をさわがせるな。おびえるな。」（ヨハネ14・27）

毎日のように事件が起こる昨今、心でしっかりと受け止めたいイエスの言葉です。そして「平和の使徒」として、少しでもこの世界に希望を証しする存在になりたいものです。

教区修女連
平成二十年度研修会開催

聖母被昇天修道会　Sr高松常子

去る六月十四日（土）に、教区修道女連盟の研修会を四国カトリック会館で開催した。

講師を諏訪栄治郎神父様にお願いし、テーマは（高松教区が推し進める）「協力宣教司牧について」。参加者は四十名。

諏訪師は、阪神大震災の体験と神戸に来ていたボランティアから、大きな「きづき」を受けたこと、教会の内向な姿を反省したこと。福音宣教のための協力宣教司牧として、谷間に置かれた人々の心を生きる教会、「交わり」の教会へ、共同責任を担うこと。聖霊の働きを識別する教会、司祭、修道者との協力の中で、信徒の使命を促す教会について語られた。

また、信徒の養成には祈りが不可欠であり、「祈りの家」を四国に！と熱い望みも語られた。午後の分科会でもこのことが話題となり、現在は松山市にある聖カタリナのセミナーハウスでの黙想、高松マリアの家での一日黙想などの可能性もあるという意見も出た。

地区だより

今年のファミリーキャンプ
信者の交流の機会として成功

徳島教会　ジョン・ジェイコブセン

今年のファミリーキャンプには徳島、鳴門、桜町、番町教会のメンバーが参加しましたが、高知からの参加者もありました。キャンプはいろいろな人と交流ができます。今年のキャンプは七月二十～二十一日でした。

先ず、みんなが山田海水浴場に集まり、海水浴を二時間ほど楽しみました。その日はすごく暑かったので海で泳ぐのは気持よかったです。あいにく、海岸である信者が毒を持っている魚を踏んで病院へ行き、キャンプに参加できませんでした。そこから南川キャンプ場に移り、オリエンテーションの後、グループに別れました。バーベキューをいっぱい食べてから、キャンプファイヤーを囲んでいろいろなゲームをし、最後には花火がありました。

参加者は百三十名余

次の朝早く、グループ毎に神様が創ってくださった自然を観察しに散歩に出かけ、葉っぱや栗を拾いました。朝食後、片付けを終えてからグループごとに聖劇の準備です。聖劇は聖書の言葉を使って面白い劇にしようと台詞と衣装を工夫しました。十一時から十二時まで各グループで聖劇を披露しました。溝部司教様もこれを見に来てくださいました。どの劇も面白くおかしくて、みんな笑いました。

昼食後、ミサが行われました。祭壇は普通の折りたたみのテーブルに、その朝集めた自然物を飾りました。ものすごく綺麗でした。ほんまに。その後、写真を撮ってさよならの挨拶をしてから帰ることになりました。

私の家族は六人です。子供四人（九歳の長男、八歳、四歳と三歳の娘達）。上の二人の感想は、楽しかったのでもう一泊したかったそうです。四歳の子も楽しいと言い、妻も教会の人とゆっくり話が出来てよかったそうです。三人の子は徳島の中学生と親しくなりました。私は三歳の子の面倒を見るのに精いっぱいであまり交流は出来ませんでしたが、キャンプは家族のためなのでそれでよかったと思っています。

キャンプは地方の信者の交流の機会として成功だったと思います。海水浴、食事、キャンプファイヤー、散歩、聖劇そしてミサを通していろいろと交流できる機会を提供してくれました。担当してくれた人には感謝しています。

ありがとうございました。

「カトリック幼稚園後継者養成研修会」に参加して
お互いの意見や立場を理解しよう

学校法人　高松聖母被昇天学院
マリア幼稚園　多田裕基子

去る七月二十四日（木）四国カトリック会館において開催された研修会には、約四十名の園長・主任などの先生方が参加されました。

溝部司教様の基調講話では「子どもを教育する場である幼稚園には大きな責任があり、そのためには教育共同体を作って、カトリック的人間観に従って責任を持つことのできる人間育成を図ることが大切である」と話されました。

また、名古屋で開催された「全国カトリック幼稚園後継者養成研修会」に参加された三名の先生方の報告をお聞きしました。

午後からの分科会では、各園の現状や課題について話し合いをしました。それぞれ課題は違っても、カトリック幼稚園としての大切な使命を果たしていきたいという想いは同じです。

今回、研修会に参加させていただいて、園長・主任・若手の分かち合いの大切さを痛感させられました。

お互いの意見や立場を理解することが人材の養成につながり、教育共同体としてのチームパワーの強化につながっていくのだと思います。

第一回カトリック小豆島教会　ユスト高山右近祭

オリーブの風薫る島で　右近賛歌で神と響く

小豆島教会　濱野尚作

去る七月六日午後一時半より濱口秀昭担当司祭の司式により、カトリック小豆島教会「ユスト高山右近祭」記念のミサを献げる事が出来ました。その節にはカンバラ神父様、村上神父様、松永神父様、西川助祭様はじめ各修道会のシスター方、大阪から高槻右近研究会の池山様、田中様、それに今治、郡中、善通寺、坂出、桜町、番町、三本松の各教会の方々、オルガニスト河合様と総勢六十五名の御参加を賜り、誠にありがとうございました。

思い起こせば、昨年大阪司教区レオ池長潤大司教様はじめ高槻右近研究会の皆様の多大なご尽力により西森方昭氏作、高山右近像を賜り、五月二十八日（月）に私たちの教会の庭に設置されました。奇しくもその日は聖霊降臨の祝日の翌日でした。「聖霊降臨あり　像来る　高山右近ゆかりの島に」。更に七月一日に溝部司教様の司式により右近像祝別式を挙行いたしました。「ユスト右近　一五八七（イイハナ）咲かせ　小豆島」（右近三十五才）。

これを記念して毎年七月の第一主日を「右近祭」と定め、今年は七月六日に【第一回カトリック小豆島教会ユスト高山右近祭】と銘打って「年間第十四主日」のミサ聖祭を開催した次第です。

司式は濱口秀昭神父様、入祭聖歌一七一「わたしたちは神の民」、キリエ、グロリア、アレルヤ唱、マタイによる福音十一章二十八節―「疲れたもの、重荷を負うものは誰でも私の元に来なさい」。濱口秀昭神父の説教は心に響き胸を打つ。共同祈願―戦国の世にありながら福音を力強く証しして、信仰の道を貫いたユスト右近を福者の列に加えてくださいますように、更にユスト右近と小豆島教会が地域の中で主のみ言葉を伝える使徒として、力強く発展していくことが出来るよう助け導いて下さいますように。拝領聖歌一六七「わが心　喜びに満ち溢れ主を待ち望む・・・・」　閉祭の歌は猛練習した「ユスト高山右近を讃う歌」（河合まりこ作詞　鈴木和之作曲）を、感謝と感動を歌に込めて大合唱し、厳粛にして荘厳のうちに、イテ　ミサ　エスト。・・・・や、いなや当教会の信者さんたちは直ちに退堂し、ソーメンパーティの準備に取りかかりました。そこで、準備の出来るまでの間、「大切なお客様が退屈なさっては、とお礼の挨拶を兼ねまして、自称私（ミカエル幕間屋ブラザー）がしゃしゃり出て、典礼聖歌三八八の小豆島バージョン替え歌「オリーブの風薫る島で」をご披露しました。河合まゆみ様の伴奏で同堂の皆様とオブリガートの心を込めて二重唱で合唱していただきました。その後は、ちめた～いソーメンパーティで談笑と団欒の楽しい時を過ごし御日良喜（おひらき）となりました。

「聖霊のもたらす一致」を具現化した「小さな教会の大きな幸せ」の一日でした。

これもひとえに皆々様のお陰、主の恵みと感謝しております。

私たち小豆島教会一同、またのお越しを　ウェイティングぐ～う！

典礼聖歌三八八　オリーブの風薫る島で
（聞かせてくださいみことばを）
作曲　蒔田尚昊（エリザベト音大一期生）
作詞　別府信夫（故人）
補作詞　濱野尚作（小豆島バージョン）

オリーブの風薫る島で
ひとびとにはなされた
めぐみの　みことばを
わたしにもきかせて下さい

小豆島教会の庭に
ジュスト像（右近）凛と立つ
ちからの　みことばを
わたしにもきかせて下さい

二十四の瞳の島で
弟子（十二使徒）たちをさとされた
救いの　みことばを
わたしにもきかせて下さい

十字架をわが胸に抱き
神は愛　主をたたえ
いのちの　みことばを
わたしにもきかせて下さい

中村教会で誕生会
ミサ後日本語の勉強会も

７月１３日、中村教会でミサの後フィリピンの４人の子供たちの誕生会で楽しい一時を過ごしました。最近母親たちで、介護の仕事をする方が１０名程頑張っています。そこで必要なのが日本語のひらがなと漢字を勉強したいとの希望で、せんせいは信者の中から引き受け手があり、タガログ語、英語、日本語と、午後の聖堂はとても賑やかです。

中村教会　山中憲子

助祭叙階式に参加して思うこと

聖カタリナ高校生　福原未来

七月十九日にカトリック松山教会で、イグナシウス・ロファンディ・ザヒヤさんの助祭叙階式がありました。

助祭叙階式に参加したのは二回目です。私は聖書の勉強をしたり、ミサに参加し

たりしていたので、助祭叙階式がどのようなものか少し分かります。もし、私が聖書の勉強をしていなかったり、ミサも参加していなくて、真っ白な状態で初めて助祭叙階式に参加したら何も分からなかったと思います。私は信者ではありませんが、このような行事に参加することでたくさんのことを学びました。また、信者の皆さんと関わることで自分の成長につながると思いました。

私は聖書の勉強やミサに参加してよかったと思います。

このきっかけを下さったのはシスターです。シスターが声を掛けて下さらなかったらたくさんの事を知らなかったし、分からないことが多かったと思います。私はシスターに感謝したいです。また、たくさんの信者さんに良くしていただきました。

シスター、信者の皆さんありがとうございました。

私は洗礼を受けるかどうかまだ分かりませんが、これからも聖書の勉強やミサに参加したいと思っています。

叙階式でのひとこま

二〇〇八年度合同食事会

鳴門教会　福田健一

去る六月二十二日、徳島教会において二〇〇八年度の徳島地区合同食事会が開催された。本来ならこれは六月二十九日に鳴門教会で行われるはずであったが、当日行われる列福式準備講座と一週間遅れで行事が連続するため、同時開催に変更されたのである。従ってこの日の日程は、ミサの後、イエズス会の川村信三神父の講演（殉教者を育んだ信仰と共同体）があり、引き続いて合同食事会が開催された。

川村神父からは、現代における殉教観と今秋行われる一八殉教者列福の意義、並びに禁教下の秘跡の重要性についての話があった。すなわち、聖職者が激減した当時の日本キリスト教界においては、秘跡への信仰が信徒間の強力な連帯意識を生み、棄教どころかむしろ存続を助長したという逆説について分かりやすく説明された。

合同食事会については今年は鳴門教会の担当であるため、あらかじめ何度か打ち合わせをして遺漏なきを期した。従来のように単に雑談をしながら食事をするだけの会に終わらせず、たのしく意義深い集会にするための内容を企画した。

初めに信徒代表の開会挨拶、続いて西川助祭から協力宣教司牧の現況説明を聞き、しばらく歓談・食事をした後で、唱歌と鳴門新名物のフラダンスを披露、最後に主任司祭の閉会挨拶…というものである。しかし実際は必ずしも予定通りの展開にはならなかったが、一応の目的を達成し、鳴門教会としては意義ある合同食事会の先駆けの役割を果たせたのではないかと思っている。

水野旅館（信徒の水野さん）から取り寄せた「鯛めし弁当」も評判がよく、散会時の参加者（七十名）の表情には充足感がうかがわれた。

医療のともしび（11）
家族に会いたい
---終末期医療の現場から---

Ａさん（６０歳）はN市に住んで普通の主婦の生活をしていました。ところが昨年の夏の定期健診で胸部レントゲンに問題点が見つかりました。精密検査を行った結果、胸部縦隔腫瘍と診断されたのです。Ａさんは主治医から「余命三ヶ月です」と告知され、天地がひっくり返るような思いをしました。Ａさんは、化学療法をしないで自然療法を実践しようと決断しました。四国がお遍路の霊場であるということもあって生家のある香川県に戻ってきたのです。１０月中旬のことでした。早速玄米食などを始めて自覚症状もやや軽くなったのですが、１２月に入った頃から足の麻痺が生じました。マルチン病院に入院して検査をしたところ、腫瘍が胸椎に転移して背髄を圧迫していることが判明しました。しばらくすると排便困難も生じてきて、浣腸と下剤で排便をコントロールしなければならなくなりました。急速に全身状態が悪化し、最後の時が迫ってきているという雰囲気が漂い始めました。

Ａさんの心の中に、人生の最後は家族のもとに帰りたいという強い望みが生まれたのです。しかし寝たきりで持続点滴の状態です。体力は極度に低下しています。どうやって帰るの！！とても無理だろうという思いの中で、私たちは可能性を探し始めたのです。規則では、原則として救急車は県境を越えて他の県の病院までの搬送は行ってならないので、救急車は頼めません。

そこで民間の搬送会社の利用を考えました。民間とは言え、消防署の救急車と全く同じ救命機器を備えており、訓練を受けた救命スタッフが同乗します。今回は国際民間救急会社「リーベン」（0120-119-751）を利用しました。6時間かかり、無事にN市の病院に到着したというニュースが入った時、私たちスタッフ一同は「よかった」と胸をなでおろしてほっとしました。約二ヶ月後にＡさんは家族に見守られながらこの世の旅を終えられたのでした。

家族から離れて遠いところにいて死が差し迫ったとき、最後は家族と共にいたい、この思いを実現するために、民間の救急搬送会社の利用が一つの方法でありましょう。

聖マルチン病院
心療内科 井原彰一

生涯養成講座「生きよー殉教」レポート
「キリシタン信徒組織と殉教の神学」を聴講して

番町教会担当司祭　松永洋司

六月二十一日（土）、四国カトリック会館で念願かなって川村信三神父様のお話を伺うことができました。今回、川村神父様は「キリシタン信徒組織と殉教の神学」についてお話しくださいました。はじめに、「現代の殉教観と殉教者列福の意義」を話されました。それは、殉教者即英雄というのではなく、信じるお方へ目を、心を向ける信仰宣言の場としての殉教の捉え方です。

そして現代人へのメッセージとしては「信じ抜く」、「絶望しない」、「愛する」をあげていました。

次に殉教とは何かをお話しになりました。「殉教者たちはキリストの教えのために無抵抗で死んだ。殉教者たちは真の勇気と謙りをもって、与えられる恵みに『はい』と言って応えた。それはまさしくイエス様の受難と死と復活に重なるキリストに倣う究極の道だった」と。

そして師は「殉教者を育む共同体（秘跡に生かされた共同体）」についてお話しになりました。「かつてヨーロッパの教会には『コンフラリア』と呼ばれる信徒のみの自主運営による共同体があった。宣教師たちはこの組織を用いてキリシタンの共同体を養成した。型としては慈善事業型（ミゼリコルディアの組）、信心業実践型（聖体礼拝型・ロザリオの組等）があった。そして迫害が厳しくなるに伴い、ますます組織もまた強化されていった。

板書もふんだんにわかりやすく講義

そのためキリシタン追放令で各地から司祭たちが消えても、信徒組織は慈善活動型から信心業中心へ型を変えて存続した。民家に集まり、祭壇を造り、潜伏し祈るようになった」と。

司祭が追放や殉教で減少するにつれ、秘跡にあずかる機会もまた少なくなりました。そのためか秘跡への思いが激しくなっていったようです。「ゆるしの秘跡を大切にする共同体に結束と継続の力あり」と宣教師が述べているように、「秘跡に集中する共同体は信仰という絆の力あり」だったと言うこともできると思います。

キリシタンたちの秘跡への集中力にあらためて感じ入りました。命の危険をも顧みず司祭を匿った宿主たちが求めたものは、聖体の秘跡とゆるしの秘跡にあずかる機会を得ることだったことからも分かると思います。ひるがえって今はどうなのでしょう。聖体祭儀は毎日あります。ゆるしの秘跡も願えばできます。ありがたい時代に生きていることに、あらためて気づかせてくださった川村神父様に感謝したいと思います。

マリア小笠原みや「永遠の命の教育」の概要

桜町教会　鈴木　裕

七月十三日午後、四国カトリック会館で長崎純心大学教授Sr片岡瑠美子氏による、史料に基づきながらもユーモアを交えた講演があり、会場は聴衆で一杯であった。

先ず司会者のSrギリスと講師の紹介によると、講師は十二代目のカトリック信者であり、曾祖父母は浦上四番崩れの際に土佐に流罪になったのが、四国との縁であったとの事。

小笠原みやとその家族についての史料は少ないということで、講演では先ず殉教とそれに至る当時の教会の状況についての説明から始まった。

当日配布された要旨の「はじめに」の所で、一八八殉教者には多くの女性や子供が含まれていて彼らが一言、二言残した言葉が現代へのメッセージ「信じぬくこと、希望すること、愛すること」であり、殉教は「無抵抗の抵抗のうちに、キリストの教えと徳のゆえに死ぬこと」（マルチリヨの勧め）として、命をかけて信じる存在としての神、弱さを助けて下さり希望をする事が出来る主の存在、更に同じ信仰を持つ家族への愛が基礎に在り、殉教とは自分の弱さを知って毎日神に助けを祈り、神の恵みで満たされての事であった。

永遠の命の教育は、天正遣欧少年使節と同行した工人等が持ち帰った活版印刷機による日本最初の印刷本「どちりいなーきりしたん」（一五九一）（キリスト教の教義）の序にある、「一切人間に後生を扶かる道の真の掟」として信、望、愛の重要性が述べられている事に基づいている。キリシタン達はそれらを学び、聞き、そして信じたのである。その第六に「けれど」（クレド、使徒信条）が記してあるが、潜伏キリシタン口伝えの「けれんど」は二五〇年後でも原文と殆ど違っていなかったように、親から子への後生の扶かりへの信仰の伝承は確実に行われていた事が分かる。第二の活版印刷本はローマの殉教史であり、当時は一五八七年の豊臣秀吉に依る伴天連追放令の後であったこともあり、識者達は来るべき司祭不在の迫害時代を予想し信仰の伝承について備えていたのかも知れない。

徳川家康の時代になると、オランダ、イギリスといったプロテスタントの国との貿易が始まり、スペイン、ポルトガルといったカトリック教国との貿易の必要性が少なくなってきた事もあり、一六一四年キリシタン禁令が出された。それでも四十数名の司祭が日本に残り、信者達は自分達の信仰の源である御聖体と赦しの秘跡を授ける司祭達を自分達の身の危険も省みず必死で守ってきた。然し徳川幕府による密告制度、五人組制度、踏み絵等により一六四四年以後日本には司祭は居なくなったが、信徒達は帳方、水方、聞き役の制度をつくり信仰を守ってきた。

はるばる長崎から
日帰り強行軍での来高

踏み絵は信者達にとって大きな重荷であった。信仰を伝える為にはやむを得ず絵を踏まねばならなかったが、足を洗う、顔は踏まない等の心遣いをし、帰って直ぐコンチリサンの祈りを唱えた。この祈りはイエズス会士のセルケイラ日本司教著「こんちりさんのりやく」（一六〇三）にある完全な痛悔の祈りのことで、後生の救いのためには地獄の罰を恐れるよりもキリストの愛に背いた事を痛悔し、心の傷を癒やしてアニマの救いを得ていた。

次いで小笠原みや一家の殉教の説明があった。みやは加賀山隼人の三女である。隼人は高山右近の影響を受けて、熱心なキリシタンになったが、右近のルソン配流の後、蒲生氏郷、細川忠興に仕え、家老に出世した。細川ガラシャ夫人と共に最後を遂げた小笠原少斎の三男、与三郎玄也にみやは嫁ぎ九人の子を産んでいる。玄也も義父と妻の影響を受け入信した。小笠原家と細川家は姻戚関係にあり、一六一四年の禁令の後も身内だからと放任されていたが、玄也は密かに司祭を長崎から招き、赦しの秘跡をうけた。一六二〇年訴人があり、玄也一家は細川家を放逐されて、二十三人捨て扶持を受け極貧の生活に入った。一六三二年細川忠利が小倉から熊本に移封された時、玄也一家も同道している。一六三四年、肥後全土にキリシタン禁制の高札が出され、一六三五年冬、玄也一家は奉公人四人を含め五十日の座敷牢入牢となった。この間一家は殉教の準備に入って形見分けと子供達も含め遺書作成に入った。遺書は従兄弟に託したが、従兄弟は細川家に持参し、以後厳重に保管された。たまたま江戸末期に遺書を見て書き写した学者があり、本物は西南の役で焼失したが、写しが現在残っていて、後生の助かりの道について、みや達を通してのメッセージの様に思える。

みや「永き後生捨てがたく申しきり」「捨てがたき宗旨故かようになり参らせ候」とあり、娘くりは「かもし様（母様）御一人の御わさにては候はす」と伯父達の説得に応じなかったのは自分達で決めたことと、母みやを弁護すると共に自分の意志を表している。みや一家は温かい家庭で互いに労り合いながら、後生の扶かりの道を望んでいた事が分かる。一方玄也はそれ以前に「忠興様何と仰せ出され候とも、この上は転びまじく候。後日のためにかくの如く申し上げ候。」との文を出している。

一六三六年一月三十日に一家と奉公人が殉教したことは、類族改や家老長岡監物の書状で明らかである。殉教地は花岡山の麓、禅定院であった。文政年間に祇園山（現花岡山）中腹に「加賀山隼人正藤原興長息女墓」の土台石が見つかっている。小笠原家は細川家と姻戚関係にあったので、小笠原みやではなく、加賀山みやとして葬ったのであろう。

尚、加賀山隼人については、宣教師の一六一四年報にも記述がある優れたキリシタンで、一六一九年小倉で殉教している。

「マルチリヨの勧め」によれば、「ヒイデス（信仰）に対して命を捨つること、人間の力に非ず、デウスの御合力無くてマルチルに成ること叶わざる也。～デウスは謙る者にガラサを与え玉う也。～」殉教についても「はじめに」の所に加えて「流罪の中、牢舎の中の難儀の故に死ぬこと。」も付け加えられた。

「永遠の命の教育」はアニマの救いを説く教会の教えを親から子に伝えていく事であるとむすばれた。

神学生だより（4）

東京カトリック神学院
哲学科２年　松田栄作

今年の夏休みの大半は，神戸で過ごすことになりました。神戸中央教会内にあるカトリック社会活動センターで８月中の１ヶ月間を，ボランティア活動をしながら過ごします。夏休み中とあって中高生などのグループが代わる代わるボランティア活動をしに来るそうですので，そのお世話をすることが主な活動内容になりそうです。当センターは，阪神淡路大震災の時に設立されましたが，今では主にホームレス・外国人支援，障害者・高齢者訪問などの活動を行っています。

思い返されるのは，私が神学生になる前に徳島教会で福祉委員として毎年冬場に釜ヶ崎のホームレス支援を企画して，青年たちと一緒に出掛けたり，重度身体障害者の方を行事のために送迎したり，また日用の必要にために一緒に買い物に出掛けたりしていたことです。正直，初めは大変だなあとか億劫だなあとかいう気持ちが先行し勝ちでした。いざ活動を始めると，そうした消極的な気持ちはかき消され，掻き立てられるような積極的な気持ちに変わるから不思議です。感動体験をすることも稀ではありませんでした。例えば，釜ヶ崎の，靴も履いていない衰弱して凍えている人におにぎり２つとみそ汁を差し出したときに，その人はおにぎり１つを残して，まだ食べていない人にと差し返してきました。そのとき私の頭の中にやもめの献金の福音がよぎり，この人にぴったり当てはまりました。このことが印象深くて，後々思い返している内に，イエズス様の伝えたかった意味を悟らされたという体験があります。つまり貧しい人の内にいるキリスト様と出会っていたのです。

神戸での活動が，福音を体験的に深める良い機会となるよう私も一緒に活動しようと思っています。この活動が，イエズス様との出会い，そして福音宣教へと繋がって行くことを願いつつ。

送別（思い出）の言葉
イスマエル神父様ありがとう

善通寺教会　樫村伸二

イスマエル神父様、十五年という長い間、善通寺教会の為に、ご尽力頂き有難うございました。

また、二〇〇八年六月三十日ＪＲ坂出駅前発（高速バス）にて、当地を出発するまで、善通寺教会新築工事及び、信徒会会員個々の相談事に到るまで、諸事万端のお世話を頂き衷心より御礼申し上げます。

イスマエル神父の思い出は、数多くありますが、信徒会と共に学んだカテキズムは、「西川助祭」を問答主として、約五年余りの勉強会が、貴重な思い出として、脳裏に強く焼きつけられています。

また、四季折々の行事遂行に力を注ぎ、信者と神父との信頼関係に聖なる権威と役割を充分に果たし、善通寺教会共同体活動に大きな貢献をされたと確信しております。

更に、イスマエル神父と毎年楽しんだ、観音寺市（有明浜）海水浴及び、春の行楽（花見）並びに、秋のパエリア昼食会など等、尽きることなく思い出がよみがえって来ます。

イスマエル神父が計画された、新しい善通寺教会が近い内に早く建て替えられ、揺ぎ無い名跡としてこの地で、信者に語り継がれる事を願っています。

最後に、イスマエル・ゴンザレス神父様が、マドリードにてスペイン外国宣教会総長として、益々ご活躍される事を期待祈念申し上げ、送別（思い出）の言葉とさせて頂きます。

有難うございました。

うつになったら

徳島教会　高田芙美

うつになったら隠していないで友達に話してください。

うつになるのは恥ずかしいことではないのですから。

その人にとってストレスが大きすぎたのだと周りの人は理解してあげてください。

そして、少しの優しさでいたわってあげてください。

心が疲れ切って病んでしまったのですから、身体の病気と同じように休ませてあげてください。

軽蔑したり、弱いからと陰口を言ったりしないで、そっと見守ってあげてください。

うつの人は心を病んで、言いようもなく苦しんでいるのですから、もう叩くのは止めて下さい。

回復を祈りながら、静かに待っていてあげてください。

お願いします。

主な司教日程

９月３日(水)上智大学
　７日(日)香川地区のつどい
　14日(日)～15日(月)
　　教区司祭大会（秋田）
　20日(土)神戸地区講演会
　21日(日)徳島地区のつどい
　28日(日)高知地区のつどい
10月２日(木)神学校委員会
　３日(金)～４日(土)
　　特別司教総会
　５日(日)下井草教会講演（東京）
　７日(火)司祭評議会
　10日(金)大阪管区司教集会
　11日(土)～14日(日)
　　講演（仙台）
　19日(日)愛媛地区のつどい
　20日(月)～21日(火)
　　東京管区司祭研究会
　26日(日)碑文谷教会講演（東京）
11月４日(火)司祭評議会
　５日(水)～６日(木)
　　東京ミラノ外国宣教会総会
　７日(金)上智大学
　８日(土)カトリック老人施設協会
　　全国大会（香川）
　12日(水)諸宗教懇話会
　19日(水)～25日(火)
　　列福式教皇特使案内

お知らせコーナー

愛媛地区
「教区民のつどい」開催予定

開催日：2008年10月19日（日）
場　所：愛光学園（案）
講　師：溝部 脩 司教

投稿記事募集

【テーマ】
テーマは、特に定めません。

【投稿要領】
字数は３００字以内（写真歓迎）
「所属教会名、住所、氏名」明記のこと。
中傷・誹謗はご遠慮下さい。
原稿はできるだけメールで送って下さい。
写真もデジカメで撮影したものはメールで送って下さい。

【投稿先】
メール：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
郵　便：〒760-0074
高松市桜町１丁目８－９
カトリック高松司教区広報担当
ＴＥＬ：087-831-6659
ＦＡＸ：087-833-1484